

第2回和光市都市農業振興計画策定委員会 会議録（要録）

- 1 日 時 平成30年7月18日（水）14時00分～16時00分
 2 場 所 和光市役所 6階 602会議室
 3 出席者 7名

委員名	選任の区分	備考
◎郭 洋春	都市農業に関する専門的な知識を有する者	立教大学総長
○富岡 正浩	和光市農業委員会を代表する者	和光市農業委員会会長代理
山崎 とよ子【欠席】		和光市農業委員会委員
石田 秀樹	和光市都市農業推進協議会を代表する者	都市農業推進協議会会長
阿由葉 和子		都市農業推進協議会委員
本橋 淳男	和光市商工会を代表する者	和光市商工会事務局長
井口 和彦	公募による市民	
竹村 幸子		

◎委員長 ○副委員長

（事務局）産業支援課 深野課長、渡辺課長補佐、野口統括主査、江口主査
 傍聴者 なし

議題1 和光市都市農業の現状と課題を踏まえた上での方向性について

事務局説明

資料1 第2回 和光市都市農業振興計画策定委員会

●和光市都市農業の将来像の案について

【 委員長 】 将来像について、提案をお願いします。

【 石田委員 】 「都心と田舎の境界線」

【 井口委員 】 「人の暮らしに寄り添う和光の農業」

【 竹村委員 】 「首都圏に近い貴重資源 和光の農業」

【 委員長 】 私も竹村委員と近い案です。「都心に一番近い農地 和光」

【 本橋委員 】 「農ある暮らし わこ産わこ消」

【 委員長 】 将来像については、今後農家懇談会等も実施予定のため、そこでの意見や今日の意見を踏まえて、最終的に絞っていきます。

●担い手の育成と確保について

【 本橋委員 】 新しく農業を始めたい方にはどのような対応をするのか。

【 事務局 】 相談を受けて、どのぐらいの規模で農業をするか等を聞いて、農地の紹介やお金の支援、指導農業士の紹介等の調整を行う。

【 本橋委員 】 農地を貸してもらえる見込みはあるのか。

- 【 事務局 】 新規就農者がすぐに農地を確保することは難しいが、農業経営基盤強化促進法の制度の中で、利用権設定をして貸付することは可能である。今使われていない農地を市で把握し、新規就農者に貸し付ける仕組みを検討している。
- 【 本橋委員 】 今現在はないのか。
- 【 事務局 】 農地を探すことはこれからの取組になる。
- 【 本橋委員 】 将来の職業として、農業に興味をもってもらうために、市内の学生を対象に説明会等を実施とあるが、職業として和光市で農業が成り立つのか。
- 【 事務局 】 すぐに農業だけで生活することは難しいため、既存の職業を継続しながら農業経営を行うようアドバイスする必要がある。
- 【 本橋委員 】 和光市では兼業農家がほとんどとの説明があったが、将来の職業として、和光市で農業することに期待が持てるのか。
- 【 委員長 】 将来の職業として、農業に興味をもってもらうために、市内の学生を対象に説明会等を実施とあるが、前回の会議でも学校教育の一環で農業について、触れる機会があった方がよいとの話があった。農業の楽しさや大変さについてPRすることは施策的にどうか。興味をもった学生に、農業を体験させることは可能なのか。体験することで、将来の職業として、農業を選択する可能性はあるか。
- 【 井口委員 】 和光市内では、自分で起業し、家族経営で行うことは無理ではないか。なお、説明会や体験農業等で、畑や野菜に興味をもった生徒が、将来の職業として選択するものは、農家だけではない。野菜の販売や、商品開発の仕事の可能性もある。野菜を食べなくなっている中で、説明会や体験農業等で、野菜に目を向けてもらって、「野菜が大事である」という意識を若いうちから持ってもらうことが大切ではないか。
また、市内の学校には、農家の子供もいる。家で農作業を手伝う機会も減っていると思う。中学2年生になると職業体験があり、今年はずのの後継者倶楽部の会員のところにも8人ほど来ていた。その生徒達に、じゃがいも収穫体験を手伝ってもらったり、様々な野菜の収穫体験もしてもらった。体験する場はある。やってみて興味がわいたら良いと思う。現在はそのような機会を増やしている状況である。
- 【 委員長 】 石田委員は、先日、新規就農の相談を受けたと聞いているが、実際に相談を受けて、課題等をどのように感じたか。
- 【 石田委員 】 相談を受けて、農業に対する夢と希望をととても感じた。農業大学校を卒業しているので、知識もあると思うが、和光で考えると、スタートは10アールにしたいとのことである。家庭菜園より少し増えたぐらいの規模のため、現在の仕事は辞めずにスタートした方がよいとアドバイスした。指導農業士のところに行き、手伝いからスタートして、和光の農業を体験して、販売先等も勉強し、それから判断してもらってもよいので

はないか。いきなり自分の畑を借りて、スタートするのはハードルが高い。せっかく和光市で農業をやりたいという希望を持っているので、できる限りの支援をしていきたい。

【 委員長 】 富岡副委員長は、援農ボランティアを利用されているということであるが、利用した上での課題やメリット等についてどのように感じているか。

【 副委員長 】 うちが受け入れた援農ボランティアは、毎日来るのではなく、パートをしているため、その合間に来てもらっていた。受け入れる方がきちんと段取りをして受け入れないと、ボランティアが来ても、作業がないような状況になってしまう。受け入れる体制を作ることが大切である。現状では、その場その場で作業をお願いしている状況である。週に数日来てもらえると、自分たちも当てにできるが、どこまで当てにしていかがが難しい。

【阿由葉委員】 いつ作業を手伝って欲しいから来てくださいではなく、ボランティアのスケジュールに合わせて行うのか。

【 副委員長 】 そうである。

【 竹村委員 】 私の友人が援農ボランティアをやっているが、いつ行ってよいか分からないと言っている。農家さんが、いついつ来てくださいと言えば、合わせて行けるが、いつ来てもいいという雰囲気のため、行ってよいか分からないとのことである。最初は期間を決めて行っていたとのことであるが、ボランティアと農家さんとの打ち合わせが、きちんとできていることが必要ではないか。

【 石田委員 】 ボランティアということで、手伝ってもらおう農家側は、強く言えなかったり、いつ活動してもらえるかも分からなかったりする状況ではないか。栽培計画を立てれば、仕事は十分にある。ボランティアとなると、頼みにくかったり、本当に忙しい時期のみお願いしたりしているのではないか。新規就農者であれば、研修生のように安定した手伝いができる計画を立てられる。ボランティアと研修生では違うが、手伝っていただけること自体は大変ありがたいことである。

【 委員長 】 手伝ってもらいたいという気持ちと手伝いたいという気持ちがうまく噛み合っていないのではないか。当事者同士であると、お互い言いにくい部分もあるかもしれないので、行政が間に入って、週に何日実施するか等の注意事項等を取り決めてもらうことで、話がスムーズになって、コミュニケーションも活発になるのではないか。

【 本橋委員 】 サラリーマンニーズについて、定年退職した人がたくさんいる。その中には、アグリパークで野菜を作っている人達がたくさんいる。市民農園のプラスアルファとして、もう少し農業に携わりたい人が山ほどいる。そのような時に、お互いのニーズが合うような、どこかでコントロールできる仕組みができればよいのではないか。ボランティアだけではなく、

違う形で農業に関与できる仕組みが十分に考えられる。農業や野菜に興味をもってもらう人を増やすことは大切である。また、都心に近い農地を有益的に残す方法も考えなければいけない。サラリーマンやリタイアした人や学生でも、やりたい人はいる。和光で1～12月の農作業のスケジュールを把握して、農家の人がどのような手伝いが必要なのかを洗い出し、人手やボランティアが欲しいということであれば、ホームページ等で情報を発信していけば、市の内外を問わず、来てもらえるのではないかと。

【石田委員】やりたいという人はいるが、新規就農者のように単独でスタートすることは大変である。受け入れる組織のようなものがあると、そこに登録することで、地主の人も、大変なときに手伝ってもらえるようになる。こういう制度や組織を作って、動かしていく中で、新規就農や、仕事にして収益が得られるようになっていく。このような組織づくりや仕組みが必要ではないか。

【竹村委員】農水省が田舎暮らしを勧める事業を実施していて、そこに参加したときに、農業をしながら仕事をしたいという人が多くいた。首都圏の近くで仕事をしながら農業を始めたいが、首都圏の近くにはあまり農地がないから、山梨や長野でやっている人が多かった。指導農業士等に教えてもらえるような和光独自の仕組みを作って、農地を残すように考えないと、新規就農者支援は、和光市の現状に馴染まないのではないかと。

●農地利用の最適化と多面的機能の活用について

【委員長】2022年の生産緑地指定解除について、農家の皆さんは把握しているか。

【井口委員】把握している。

【竹村委員】市民が残してほしいと思っても、相続があるとどうしても農地が減少してしまう。本当に守る気があるならば、市の条例等で関与しない限りは、農地の確保は難しい。

【委員長】農家レストラン等ができれば、農地等に、より関心を持ってもらえると考えられるが、どうか。

【阿由葉委員】和光の農家レストランといっても、イメージしにくい。和光の農産物の特徴を考えてしまう。昔は新倉うどんのイメージがあった。

【石田委員】今は和光市内では小麦の生産をほとんどしていない。

【竹村委員】私達の団体では、市内の農地で小麦の種まきから収穫、うどんづくりまで一貫して体験させている。若い人達の参加が多く、参加者は大変感動している。

【阿由葉委員】市民農園は、アグリパーク周辺にしかない。家の近くにないと、借りることは難しいのではないかと。

- 【 竹村委員 】 自転車やバスで来られる方もいる。
- 【 委員長 】 新規就農等を考えると、毎日の作業が必要となるため、交通手段がバスであると難しいのではないかと。通いやすさや手軽さがないと、農業に関心があっても、持続することは難しいかもしれない。
- 【 竹村委員 】 港区や池袋からも来る人はいる。和光市駅でレンタカーを借りてきて参加する人もいる。市民農園は市内在住か在勤が条件であるが、和光市内だけではなく、首都圏の人のニーズもあるのではないかと。
- 【 井口委員 】 市民農園や体験農園の充実は、ただ広くするだけではなく、利用できる範囲を増やすという考え方もできる。市民向けの市民農園だけではなく、市外からも来てもらってはどうか。
- 【 委員長 】 新規就農のほか、市民農園や体験農園を充実させていくことも重要である。
- 【 本橋委員 】 サラリーマンの中には、疲れている人も多い。農商工連携の会議をしていた時に、出勤の途中で土いじりをして野菜を作ってから会社に行く。帰りにまた畑の様子を見るとという人がいた。都内ではビルの屋上を利用して畑を作っている。和光ではこのようなシステムが一番合っているのではないかと。例えば、体験型であれば、週末だけでよいが、リタイアする人向けに、シルバー人材センターではないが、それをシステム化することで、生産性があり、価値が生じて持続可能なものができるのではないかと。さらに、そこで収穫した野菜を使って、食文化研究会のような団体等が、その料理や食事を提供したりする中で、6次産業化に向かえる。また、副委員長のいちご農園は、駅からこんなに近い場所でイチゴができるという高い付加価値が付いている。また、ワークライフバランスの観点からであれば、農業生産のみでたくさん労働するものではないのではないかと。
- 【 石田委員 】 都市農業の振興の視点で見ると、主体は農家だけではなく、市民農園や体験農園を提供する業者もいる。スマートフォンで、畑を見られる市民農園もある。和光市民だけではなく、農地を活用したい人にも農地を開いていくことも、農地の活用手段にはなる。地権者にもこれらの情報を案内していくことも農地活用の一つにつながるのではないかと。
- 【 竹村委員 】 市が管理している市民農園ということで安心感がある人もいるので、業者が管理する市民農園の場合には、抵抗のある人もいるかもしれない。
- 【 石田委員 】 業者が実施する場合には、道具も一式そろっていて、体一つで行けばよい。肥料もある。気軽にスタートできるセッティングをしている。指導してくれる方も待機している。農地利用の手段の一つにはなるのではないかと。
- 【 本橋委員 】 農地の活用の考え方は、商店街振興と同じである。商店の人がまず何をしたいかを決める。もし分からなければ専門家を紹介する。いろいろな

選択ができる中で、まず農家の皆さんが何をしたいのか。分からない場合には、専門家に聞いたり、先進地を視察したりする。農地を持っている人の意見が一番重要である。

- 【 石田委員 】所有者が高齢になって、農地を残したいが、駐車場にはしたくない場合に、活用方法を見つけて、農地のまま残してもらうことが良い。耕作放棄地にされてしまうことが一番良くない。周りにも迷惑がかかってしまう。耕作放棄地ではなく、何らかのかたちで活用してもらい、優良農地として残す。気軽に困っている人達から相談してもらえるようにしていかないと、優良農地は残らない。
- 【 井口委員 】和光市駅は利便性が高い。和光市駅からアグリパークの足を整備するか、行き方を案内して、都内の人に向けてPRする。また、アグリパークの中に、道具を置く場所を設けるだけでも、利用しやすい場所になるのではないか。利用者が増えてくれば、誰かの土地を借りて市民農園を増やす。そうすることで少しずつ優良農地が増えていくのではないか。
- 【 本橋委員 】何が付加価値かを確立しなければいけない。駅からアグリパークの道のりは、3キロぐらいであるが、目的があって行くならば苦ではない。3キロ先にも素晴らしいものがあるということが大切である。

●農産物の付加価値の創造と販売力の強化について

- 【 本橋委員 】説明した施策の案について、設計プランはあるのか。
- 【 事務局 】和光市の現状から、こういうものが案としてどうかというものを資料にしている。この会議でそれぞれの案について議論していただき、その後に調整に入りたい。
- 【 竹村委員 】和光ブランドに認定されたものは、その後売り上げは伸びているのか。
- 【 事務局 】認定されたブランドについては、各種イベント等でPRを行っている。全てのブランドを足し上げた金額では、平成27年度と28年度を比較すると6,000万円から1億円に上がっている。
- 【 竹村委員 】とりかいさん家のいちご園に来る人は、ネットを見てくる人が多い。首都圏から車で来る。また、帰りに、直売所に寄ると、イタリア野菜があったと喜ぶ人もいる。これらを宣伝することが大切ではないか。
- 【 本橋委員 】どこに向けて発信するかによって、フェイスブック等の媒体を分ける必要がある。ニッポン全国鍋グランプリは、知らない人の方が圧倒的に多い。その情報をどう知らせていくか。ただ広報やホームページでは限界がある。発信するためには、野菜の付加価値を付けることが大切である。市民ニーズとして、うちの妻も直売所に買いに行っているが、やっているのを知っているから行く。魅力ある商品を作ることが大切である。
- 【 井口委員 】直売センターができたことで、色々な種類の野菜が出てくるようになった。なお、農協という一つの会社を市がPRしてもよいのか。

【 事務局 】市としては、わこ産わこ消を推進している。その視点での農協との連携は今後も拡充していきたい。情報発信も続けていきたい。

●農業への理解の醸成と交流の活性化について

【 竹村委員 】学校給食にはどのぐらい和光産を入れているのか。

【 事務局 】金額ベースでは約18%である。目標は30%である。

【 井口委員 】学校側から、この時期にこの量で仕入れて欲しいという要望があるが、時期的に多くの量を入れることが難しいときもある。また、全ての給食センターに1時間以内に持っていかなければいけないなどの条件もあり、なかなか難しい。そのため、受けてくれる農家も多くはない。出荷協議会の組合長が頑張っていて色々ところで荷を集めていただいている。農家も声をかけてもらって、なんとか物を出している状況である。年度当初に、給食教会と出荷の調整会議もしている。一ヶ月前に量を指定されるが、収穫した全てを出荷できるものになるわけではないため、それを超える量をキープしていないといけない。これを踏まえながら、それぞれの農家が、限界に近い量を受注している状況である。また、案の中に、小学校以外の施設等にも野菜を出荷するというものがあったが、それはありがたい話である。

また、ファームマイレージについて、シールか何かを農家が貼って出荷するのか。

【 事務局 】農協か販売先がシールを貼っている。また、ファームマイレージのコーナーを作って売っている。

【 井口委員 】シールのコストが大きくなるため、どこが負担するかが問題である。やってみたいと思うが、その仕組みをどう作るかである。

議題2 和光市における都市農業6つの機能の発揮について

事務局説明

資料1 第2回 和光市都市農業振興計画策定委員会

【 委員長 】事務局から6つの機能の説明があったが、これ以外にも何かあれば意見ををお願いします。

【 井口委員 】この資料に、ほとんど含まれているのではないか。

【 本橋委員 】バイオマスはやっているか。

【 事務局 】堆肥については、生産者への配布をしている。バイオマスはまだ実施していない。

議題3 農業者アンケート（案）について

事務局説明

資料2 和光市産業振興計画見直しのための農業者意向調査

- 【 委員長 】 ご意見があればお願いします。
- 【 副委員長 】 問5について、自分の家の農業をどの世代までつなげていきたいかがあるが、この質問はどうなのか。10年後までとかの方が良いのではないか。自分の子供や孫の代が続けるかどうかは、それぞれが決めることで自分が決めることではない。
- 【 石田委員 】 相続税の関係もあり、続けさせてもらえるか分からない現状である。今後の税制状況が不明な中で答えることは難しい。
- 【 事務局 】 他市のアンケートでは、5年後、10年後という書き方もある。この問5については、今回の意見と農業委員会で相談させていただいて、修正を図りたい。
- 【 本橋委員 】 人材、後継者対策、新しい農業生産物、販路を開拓しているなど、それぞれが取り組んでいることを聞いた方がよいのではないか。また、今後、持続可能な生産のために必要なことは何かを聞いた方がよい。これを見れば、何に取り組んでいて、今後何が必要かが分かる。
- 【 事務局 】 前回のアンケートで、売上高や採算性を高めるために既に実施されている、営農上の工夫や対策について聞いているが、それを踏まえて質問を修正する。
- 【 委員長 】 事務局と農業委員会で調整し、修正をお願いします。また、委員からも意見や修正点等があれば、来週中までに事務局まで連絡をお願いします。

その他について

事務局説明

今後のスケジュールの説明

- 【 委員長 】 本日の議題は以上となります。これで会議を終了します。